

整然と並べられ、
最上の仕事を待つ道具たち。

大澤 光民「鑄金」

This photograph captures a well-organized workshop setup for traditional Korean lacquerware (Hangeul: Hanji) or woodblock printing (Hangeul: Hwahwa). The scene is set on a light-colored wooden floor. In the upper left, a wooden tray holds several wooden mallets of varying sizes. To the right of the tray are three ceramic bowls: two large white bowls filled with a light-colored liquid (likely lacquer or ink), and a smaller, rounded brown bowl also containing a similar liquid. On the far right, a dark brown cup contains a brush with a long, thin, light-colored wooden handle and a dark, bristly head. The lower half of the image is dominated by two rows of tools. The top row consists of long, thin wooden spatulas or knives with light-colored wooden handles. The bottom row features a variety of brushes and tools, including a large brush with a wide, light-colored wooden handle and several smaller, pointed tools with dark heads. The arrangement suggests a professional workspace where these tools are used to apply and manipulate lacquer or ink onto surfaces.

大澤さんが鋳型をつくるときの道具。自身の右側に整然と並べられ、仕事が始まる。手前が、ヘラや刷毛など。向こうの一段高い台の上にあるのが、鋳ぐるみをつくる時に使うキリ、全づち、釘、直ん中が、水や粘土を溶かした液など。

磨り減つた5センチの歴史

磨いたよう光るヘラが、大澤さんの手に握られる。自分で材質を選び、幅や先端の角度などを調整した大澤さんの手と仕事に合った道具である。「鋳型」をつくるときには、ヘラがいちばん大事な道具ですね」

独自の技法「鋳ぐるみ法」を生み出し、新しい作風をつくりだした。

※バリができて、鑄物がきたなくなる」
きれいな鋳型をつくるためには、硬い頃からそうでしたね」

最上の出番を待つてゐる

2006年に、高岡市美術館で「大澤光民の全貌展」が開催されたことで、これまでの反省点ややりたいことが見えてきたと大澤さんは言つ。

線で表現してきたことに面も取り入れてみたい、追求したいと思っていた表現にもう一度取り組んでみないと、大澤さんの思いは広がる。

い感性のものをつくりたいですね」
使い慣れたヘラが、大澤さんの手の

中で光る。「いつも使つていれば鎌も出ない。きれいなんです」と、大澤さん。工房に整然と並べられた道具は、大澤さんの次の発想を形にするために、静かに仕事を待つてゐる。



「鑄ぐるみ鑄銅花器」
第38回日本伝統工芸富山展 日本工芸会賞
高岡市美術館蔵



A photograph showing a collection of metal blades and tools arranged on a light-colored wooden workbench. The blades vary in shape and size, including straight razors, a stiletto knife, and several larger, flat-bladed knives. Some blades are polished and reflective, while others are dull or have serrated edges. In the background, a pair of pliers and a yellow-handled tool are visible.

A vertical collage of three images. The top image shows a wooden shelf filled with long, thin metal files or rasps. The middle image shows several large, round, shallow metal bowls hanging from a wooden beam. The bottom image shows two wooden boxes filled with many small, sharp metal tools, likely chisels or punches.



大澤 光民 おおざわこうみん

1941年	高岡市生まれ（本名 幸勝）
1958年	富山県立職業補導所銅器科卒業 越井銅器製作所就業
1969年	大澤美術鑄造所創立
1984年	第31回日本伝統工芸展日本工芸会 奨励賞
2000年	第47回日本伝統工芸展高松宮記念賞受賞
2004年	卓越した技能者「現代の名工」表彰
2005年	重要無形文化財保持者（鑄金）認定



- ※焼型铸造
粘土や水、和紙などを配合した土で铸造型をつくり、約900度の高温で烧いてから、溶けた金属を流し込む铸造法。
- ※中子型
外型に入れる一回り小さい铸造型。铸造作品の空洞部分。
- ※バリ
溶けた金属が型と型との境目にはみ出した部分。

「これ以上の道具はない。外型の工程が終わると、はり土をすら。粘土を数ミリの厚さに伸ばし、外型にすき間なく張っていく。これが、作品の厚みとなる。そこに、中子型となる土を詰めていく。最初は砂土を、それから荒土を詰める。

この土の粘りが難しいという。粘りが足りないと湯圧で砂が崩れてしまう。かといって粘りがありすぎてもいけない。

「どうしたらしいものができるか、きれ
独立する前に勤めていた铸造所でも、
20代の大澤さんは、「片づけた方が能率
が上がる」と、道具や型を整理すること
を提案し、「改革」していったという。
よく働きたいという思いが強い。
「片づけは、こだわってますね。気持ち
がいいし、やる気が起きますから」
とにかくいい仕事をしたい、気持ち
が見事である。壁にはフルイが目の粗
さの順に掛けられ、棚には、鋳型の補強
に使う鉄筋が、長さ、太さ、曲がり具合
など同じようなものを分類して置いて
ある。つまり、何かが必要なとき、すぐ
取り出せるのである。

「しなりの微妙な感覚ですね。この数本
があれば、どんな型でもできますね」
今、使つてゐる軟らかいへラは、時計
のゼンマイをつくる材質だという。28
歳で独立してから、ずっと使い続けて
きたものだ。
「これは、最初は18センチほどあつたん
ですよ」
それが今は、13センチ程度。長年の
仕事で磨り減つたということになる。
その5センチに、大澤さんの創作の
喜びと技への挑戦がある。へラは、仕事
の丁寧さと、技を磨いてきた日々の代
弁者かもしれない。

この中子型は、「笄(こうがい)」と呼ぶ細い鉄筋で固定するが、大澤さんは、これを抜き忘れたまま着色工程に出したことがある。すると、化学反応で銅とは違う色になつて戻ってきた。「これで、模様をつくれば面白いのではないか」。「鍛ぐるみ法」は、こうして生まれたといふ。

深い黒の曲面に走る銀と朱の線。銀はステンレス線、朱は銅線をあらかじめ釘で固定して埋め込んだものである。表現の可能性を求める大澤さんの創意欲は、抜かれるはずの材料を、作品の素材に変えた。

いになるかと、いつも考えていた。小さ
い頃からそうでしたね」

いになるかと、いつも考えていた。小さ
い頃からそうでしたね